

奥能登・春蘭の里における農村の活性化

The Revitalization of Farming Village at 'Shunran no Sato' in Oku-Noto, Ishikawa, Japan

浦 達 雄*

URA Tatsuo

Farming villages are facing turning point and have difficulty for the future. The revitalization of farming villages at Noto peninsula in Ishikawa Japan have started second half of 20th century. 'Mikohara' in Hakui and 'Shunran no Sato' in Noto-machi are typical examples. 'Mikohara' has succeeded for revitalization by branding of rice crops, and 'Shunran no Sato' has obtained a meaningful outcome by welcoming school trips and improvement of farmer's inn. This paper will focus on 'Shunran no Sato' at Oku-Noto area, in the depth of Noto peninsula, with its establishment, development, current situation and the future task.

キーワード：春蘭の里 (Shunran no Sato), 能登半島 (Noto Peninsula), 農村 (Farming Village), 活性化 (Revitalization)

1. はじめに

(1) 研究の背景

石川県の能登地方には、20世紀後半から農業や農村の活性化に取り組み、21世紀に入って成果が現れた地域事例がある。その代表的な事例は、羽咋市の神子原、能登町の春蘭の里である。前者は神子原米のブランド化によって、農業の活性化に成功した事例、後者は農家民宿の整備で、修学旅行の取り込みを行い、農村の活性化に成功した事例である。

ところで、日本の農業や農村は転換期を迎えたと言われ、長い月日が過ぎ去った。少子高齢化に直面している地域は大半が農村などの第1次産業地域であり、限界集落そして消滅集落までが出現しつつある。農村の人口減少は著しく、能登半島では奥能登に位置する珠洲市の場合、1954年の市制当時38,157人を数えたが、2014年9月末現在は16,007人まで減少し、先行きが怪しくなってきた。

「困った時の観光頼み」という言葉がある。日本政府は2003年1月に「観光立国宣言」をしたが、言葉を変えれば、工業立国からの転換であり、まさに困った時の観光頼みと言えよう。

21世紀に入って地方都市・中心商店街・温泉地などは、観光による活性化を求めているが、大学までもが観光による活性化を意図し、全国の大学に観光系学科が40数校も登場したのは周知の事実であろう。

近年、ニューツーリズムと称する新たな観光の分野が登場し、着実に定着している。具体的には、農村ではエコツーリズム・グリーンツーリズムなどである。前者は自然環境保護の観光、後者は農業（農村）観光のことであるが、着地型観光・交流や触れ合いなどをテーマとしており、旧来型の発地型観光と比較した場合、新しいタイプの観光形態かも知れない。

今回、地域活性化に成功した農村地域にスポットをあて、その実態を究明することは、日本における農村（農業）の将来展望を図る上で、有意義だと思い、テーマを設定した。中でも、農村や農家民宿などを整備し、地域

*大阪観光大学観光学部

の活性化に成功した春蘭の里（石川県鳳珠郡能登町）を地域事例として取り上げ、その活性化の背景や過程などの実態を把握することで、その問題点と課題を整理することは実に意義深いと考え、研究テーマを設定した次第である。

(2) 研究の目的と方法

本研究の目的は、春蘭の里を事例として、地域活性化の実態を明確にし、合わせて今後の課題・方向性を明示するものである。その際、活動母体である春蘭の里実行委員会の活動、そして地域や石川県当局の動きなどを分析することで、活性化の実態把握を行いたい。

研究の方法は、文献調査・野外観察・マスコミ情報の整理・聞き取り調査などである。文献調査は主に各種広報誌・機関紙・情報誌どの閲読、聞き取り調査は実行委員会の関係者・地域住民・民宿経営者・石川県庁の関係者などに行った。

(3) 従来の研究成果

農村観光、グリーンツーリズムに関する文献は、観光地理学の立場では比較的多い。しかし、春蘭の里に関する研究となると、その数は限定されよう。その主な研究成果としては山下良平・一ノ瀬友博（2011）、黄靖恵（2013）などがある。前者は農村計画学の立場での分析で、過疎地型地域経営モデルについて合意形成の視点から整理している。後者は東洋大学の修士論文で、持続可能・グリーンツーリズム・民宿村・春蘭の里・阿里山をキーワードとして春蘭の里の開発過程について追及している。春蘭の里に関する報告書・HP・PDFなどは実に多く、参考になる点が多い¹⁾。

(4) 研究対象地域

春蘭の里は、行政的には石川県鳳珠郡能登町宮尾・鮭尾地区を中心に位置する（図-1）。能登半島の奥能登に立地し、いわば中山間農業地域となる。2014年10月1日現在の人口は宮地113人・鮭尾73人、世帯はそれぞれ48世帯・31世帯を数える。交通は国道249号線と県道26号線（珠洲道路）に連結する県道37号線が地区内を通っているが、本庁舎のある宇出津まで約19km（30分）、金沢まで約105km（1時間50分）の距離にある。2003年には約8km先に能登空港（輪島市三井町洲衛）が開港し、羽田空港とは80分で結ばれている。

2. 春蘭の里の成立と発展

(1) 春蘭の里実行委員会の設立とその背景

この地区は、能登町内でも高齢化率が高く、過疎化が進展する地域であった。そのため、将来を案じて、1996年9月に春蘭の里実行委員会（以下、実行委員会）が成立した。設立時のメンバーは7人で、宮尾・鮭尾地区の異業種（農業・林業・建設業・会社員など）の方々が参加した。集落全体の合意形成から始めるよりも、まずやれる者から始めることにした。その趣旨は過疎化が進展する村落に対して「むらづくりの推進体制」を確立し、その後、各種事業を展開することで農村や農業の再生に取り組むことである。現在では12の集落に拡大している。

(2) 主な歩み

表-1は春蘭の里の歩みについて示したものである。1996年、実行委員会ではまず春蘭の里会員制度を実施して活動を開始した。民宿第1号は1997年で、実行委員会事務局長・多田喜一郎が春蘭の宿を開業し、先駆けることになった（写真-1）。その経営方針は一日一客・地域の食材の活用・輪島塗の箸と膳の利用などである。

同年、実行委員会では山菜・林産物の販売、そしてキノコ山の整備（現在32ha）を開始した。1998年には（有）春蘭の里ファームを設立し、農産物の生産・販売を組織的に行うことになった。2002年には菓子製造業、

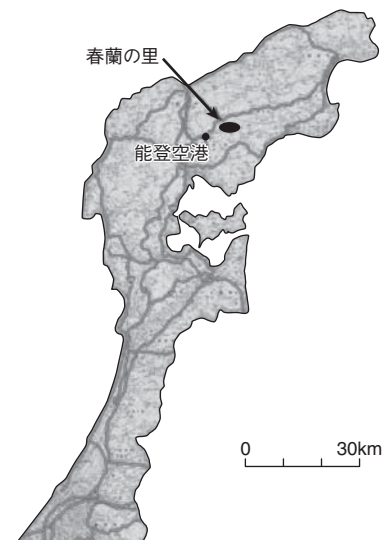


図-1 春蘭の里の位置

表-1 春蘭の里の歩み

西暦	事項
1996 年 (平成 8 年)	9 月、春蘭の里実行委員会結成 (異業種 7 人参加)。 春蘭の里商標登録。蘭の栽培圃場・ハウスを整備。 春蘭の花の分布状況調査実施。 イメージソング作成。清酒「春蘭の里」販売。米穀販売店「春蘭の里」開業。 春蘭の里会員制度開始。1 億円の売上を目指す。
1997 年 (平成 9 年)	春蘭の宿開業。春蘭の里ロッジ開業。山菜・林産物販売開始。 キノコ山整備。5 人が 17 ha 購入。事前に所有する 15 ha と合わせて 32 ha となる。宿泊客 30 人。
1998 年	(有) 春蘭の里ファーム設立。
1999 年	石川県の試験研究に協力して春蘭の産地化に取り組む。
2001 年	のと愛業市場開業。
2002 年	菓子製造業・農産加工業の許可。第 2 ロッジ開業。3 月、宮地小学校閉校。
2003 年 (平成 15 年)	石川県初のグリーンツーリズム促進特区認定 (農家民宿 4 軒、市民農園 3 戸)。 石川県教育旅行誘致実行委員会設立。民宿開業時の施設・設備の簡易化。 農家民宿 5 軒。
2004 年 (平成 16 年)	第 21 回地域づくり団体全国研修交流会受け入れ。 (農事組合法人) のと夢づくり工房設立。わら製品農産加工物の製造・販売。 水車小屋完成。
2005 年 (平成 17 年)	1 月 7 日、NPO 法人コブシ設立。能登町誕生。能都町、柳田村、内浦町合併。 自然石池水路完成。小型電力発電完成。
2006 年 (平成 18 年)	親水公園 (宮地川)、炭焼き窯完成。 宮地交流宿泊施設「こぶし」開業 (宮地小学校の跡を利用)。改修費は 5,300 万円 (補助金)。 (財) まちむら機構、農村漁村農家民宿に係わる取り組み事例 10 選に選定。 能登町健康魚・あすなろモロコシ生産組合設立。(淡水魚の養殖)。
2007 年 (平成 19 年)	半島振興フォーラム全国大会開催。インターンシップ (就業体験) 受け入れ。 伝統芸能「みのむし祭り」復活。農家民宿 15 軒。
2008 年 (平成 20 年)	子ども農山漁村交流プロジェクトのモデル地区。修学旅行の問い合わせ増加。 農林水産省、「立ち上がる農山漁村」選定。
2009 年 (平成 21 年)	農家民宿 30 軒。200 人の受け入れ体制確立。 中日農業賞受賞。 石川県観光戦略推進部国際観光課、海外からの教育旅行の誘致開始。
2010 年 (平成 22 年)	中国 7 団体 (江蘇省無錫市の無錫市外国語学校など)、国内 4 団体受け入れ。 宮地地区のキリコ祭りが復活。 10 月、生物多様性条約第 10 回締約国会議 (COP 10) のエクスカージョン受け入れ。 里山の整備事業開始 (林野庁補助事業)。
2011 年 (平成 23 年)	6 月、能登の里山里海、世界農業遺産に認定。 10 月 1 日、BBC ワールドニュースで「ワールドチャレンジ 2011」のファイナリスト 12 組にノミネート。
2012 年 (平成 24 年)	1 月、北京、貴州省から視察。 1 月 13 日、石川県景観形成重点地区指定。 7 月 7 日、春蘭の里寄り道パーキング開業。7 月、中国広州から修学旅行生。 12 月、第 40 回毎日農業記録賞最優秀賞受賞。
2013 年 (平成 25 年)	1 月 13 日、石川県景観形成重点地区指定。 2 月 9 日、地域づくり総務大臣表彰。 2 月 14 日、第 3 回地域再生大賞北陸・東海ブロック賞決定。3 月、農家民宿 40 軒。 5 月、汪 銘皓 (台湾出身)、農家民宿「たかお」開業。 5 月 29 日、大阪から修学旅行生 (中学生 5 クラス・173 人、教職員 13 人) など約 200 人。 キリコ祭りの体験、田植えなどを行う。2 泊の売上は約 400 万円。1 軒に 4~5 人宿泊。 6 月 24 日、12 集落に農家民宿 47 軒。月 60 万円を売り上げる民宿登場。 10 月 29 日、皇太子が視察。
2014 年	5 月 10 日までにイスラエル人 419 人宿泊。昨年実績の 3 倍。外国人の 9 割を占める。

(注) 各種資料により作成。



写真-1 春蘭の宿



写真-3 寄り道パーキング



写真-2 こぶし



写真-4 能登米づくり

農産加工業の許可を得て、産業としても力を注ぐことになった。しかし、同年3月、宮地小学校が閉校した。

2003年、石川県当局は、春蘭の里をグリーンツーリズム促進特区に認定し、その結果、農家民宿4軒、市民農園3戸が成立した。石川県では19の市町村と金沢市の一部が指定を受けた。こうした中で、同年7月、能登空港が開港し、東京との利便性が強まった。その結果、農家民宿は5軒に増加した。

2004年、宮地交流宿泊施設「こぶし」が開業した(写真-2)。これは廃校になった宮地小学校を再利用したもので、春蘭の里の中核施設として機能することになった。同年、農事組合法人のと夢づくり工房が設立し、特産品開発を本格的に行うことになった。さらに、2005年1月7日、NPO法人コブシが設立した。設立目的は高齢者に対して高齢者集合住宅事業等高齢者福祉に関する事業を行い、高齢者の福祉増進に寄与することである。事業としては高齢者福祉事業の他、グリーンツーリ

ズム関連事業を行うこととしている。その他の概要は表-2に示す通りである。

同年4月、能都町・内浦町・柳田村が合併して能登町が誕生し、まさに奥能登の中核地域としての地位を占めることになった。2006年は親水公園・炭焼き窯が完成し、さらに能登町健康魚・あすなるモロコシ生産組合が設立し、地域機能の強化が図られた。

2007年は半島振興フォーラム全国大会を開催し、インターンシップ(就業体験)の受け入れを開始した。この年、農家民宿は15軒に増加した。2008年には子ども農山村漁村交流モデル地区に指定され、石川県当局の働きもあって、教育旅行の問い合わせが増加した。2009年にはこれまでの活動に対して中日農業賞を受賞した。農家民宿は30軒に増加し、修学旅行生200人の受け入れ体制が確立した。

2010年には修学旅行が増加した。中国から7団体、国内から4団体の受け入れを行った。地元行事の再現

表-2 NPO 法人コブシ事業申請概要

<p>1. 団体の概要</p> <p>(1) 設立年月日：2004 (平成 16) 年 10 月 1 日</p> <p>(2) 所在地：石川県鳳珠郡能登町字宮地 1 字 1 地</p> <p>(3) 設立目的：高齢者に対して高齢者集合住宅事業等高齢者福祉に関する事業を行い、高齢者の福祉増進に寄与することを目的とする (事業としては、高齢者福祉事業のほか、グリーンツーリズム関連事業を行うこととしている。)</p> <p>2. 申請内容</p> <p>(1) 事業の実施区域：石川県鳳珠郡能登町宮地校下地区 (宮地・鮭尾・太田原・柏木)</p> <p>(2) 事業目的：宮地校下地区の 4 集落は高齢化率が 50% を超える限界集落であり、集落の活力の低下等の問題が顕著になっていることから、都市農村交流事業を手がけている春蘭の里実行委員会や特産品開発を行っている農事組合法人「夢づくり工房」と連携して、定住促進に向けた体制整備、地域特産品の開発、地域ブランドの確立を活動の柱とし、新たな農村コミュニティの再生を目指す。また、旧宮地小学校卒業生を中心に、都市住民に対して地区の情報発信を積極的に行い、ふるさと再発見とふるさと回帰による交流人口及び定住人口の増大を図る。</p> <p>(3) 事業概要</p> <p>①行政機関、学識経験者、地域住民代表、春蘭の里、夢づくり工房、NPO 法人等によるワークショップを開催し、定住促進に向けた体制整備を行うと共に、定住促進のための情報提供活動を行う。</p> <p>②地域内にある空き家を調査し、空き家情報バンクを構築することにより、利用可能な空き家の情報を提供する。</p> <p>③夢づくり工房、農家等との連携により、わら製品や山菜加工品等地域特産物を開発する。</p> <p>④ビジネス・ノウハウを有する地元人材を発掘し、人材バンクを設置する。</p> <p>(4) 事業期間：2006 (平成 18) 年度～2008 (平成 20) 年度</p> <p>(5) 2009 (平成 19) 年度事業費：2,352 千円 (国費 1,176 千円)</p>

(注) 春蘭の里実行委員の資料による。

も行われ、宮地地区でキリコ祭りが復活した。これはインターンシップ生 14 人が里帰りすることで実現した。さらに林野庁補助事業として里山の整備事業が始まった。同年 10 月、生物多様性条約第 10 回締約国会議 (COP 10) のエクスカーションを受け入れ、SA-TOYAMA (里山) の代表として紹介された。

2011 年 6 月には能登の里山里海が世界農業遺産の認定を受け、同年 10 月には BBC ワールドニュースで「ワールドチャレンジ 2011」のファイナリスト 12 組にノミネートされ、情報発信が世界に向かって行われた。その結果、世界中から 600 件の応募があったにもかかわらず、第 4 位を獲得した。

2012 年 1 月、北京そして貴州省から視察が入り、7 月には中国広州から修学旅行生の受け入れを行った。同

年 7 月 7 日には春蘭の里寄り道パーキングが開業した (写真-3)。駐車場・地元特産物販売所と共に電気自動車充電スタンドを整備し、春蘭の里の立ち寄りスポットとして機能することになった。同年 12 月、第 40 回毎日農業記録賞最優秀賞を受賞し、これまでの活動が評価されることになった。

2013 年 1 月、石川県景観形成重点地区に指定され、2 月には地域づくり総務大臣表彰、第 3 回地域再生大賞北陸・東海ブロック賞が決定した。同年 3 月、農家民宿は 40 軒に増加した。同年 5 月、インターンシップ生、その後、実行委員会のスタッフを経験した台湾人・汪銘皓 (ワンミンハウ) が農家民宿「たかお」を開業し、民宿経営も国際化することになった。

さらに同年 5 月には大阪から修学旅行生 (中学生 5 クラス・173 人、教職員 13 人) など約 200 人が入り込んだ。主な活動としてはキリコ祭りの体験・田植えなどを行った (写真-4)。その結果、この 2 泊の売上は約 400 万円となった。1 軒に 4~5 人の生徒が宿泊したのである。同年 6 月には 12 集落にわたって農家民宿は 47 軒となった。

2014 年になってイスラエルからの観光客が増えてきた。5 月 10 日までに 419 人がやってきて、外国人の 9 割も占めることになった。この数値は昨年実績の 3 倍以上となる²⁾。イスラエルの富裕層は、日本の原風景といえる能登での田舎暮らし体験や住民とのありのままの交流に好感を示し、円安による「日本ブーム」も追い風となっている。

ところで、イスラエルからの観光客が春蘭の里を最初に訪問したのは 2012 年のことである。同国からの観光客誘致に実績がある「日本の窓」(京都市)³⁾が 50 代以上の富裕層をターゲットにした 10~14 日間の日本ツアーのコースの中に、東京・京都・大阪などと並んで春蘭の里を組み込んだのが始まりとなっている。春蘭の里には 2012 年に 24 人、2013 年に 120 人が訪問した。

(3) 宮地交流施設「こぶし」と観光客の実態

こぶしは少子化により 2002 年 3 月末に閉校した宮地小学校を整備することで、2006 年 4 月 20 日、町が国と石川県の補助を受けで簡易宿泊所として開業した。運営は宮地小学校の校区 4 集落で設立した NPO 法人コブシが行っている。町から指定管理を受託しているが、指定管理料はなく、全 10 部屋をオーナー制で運用している。客室 1 室ごとに地元住民からオーナーを募集し、オーナーは 1 ヶ月に 17,000 円の運営管理費を NPO 法

表-3 春蘭の里における宿泊客の推移

年度	民宿全体	こぶし	合計
2006	527	681	1,208
2007	1,007	1,020	2,027
2008	1,485	1,747	3,232
2009	1,474	1,960	3,434
2010	1,514	3,510	5,024
2011	1,669	3,893	5,562
2012	3,150	4,551	7,701
2013	3,996	4,606	8,602

(注1) 2006年4月20日、こぶし開業。

(注2) 春蘭の里実行委員会による。

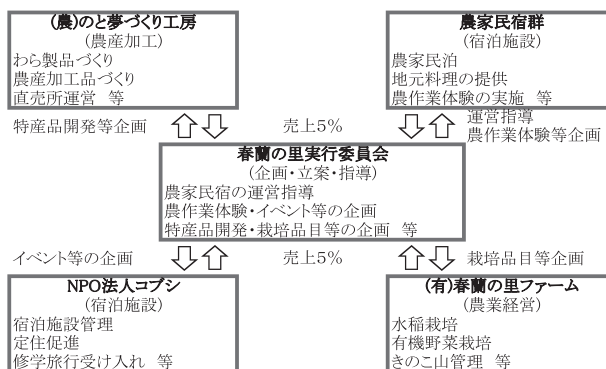


図-2 春蘭の里の運営体制

(注) 春蘭の里実行委員会の資料による。

人に支払っている。部屋の清掃や管理を行い、宿泊があれば各オーナーに配当される仕組みとである。

こぶしは2階建てで、2階の5教室をそれぞれ半分に仕切り、これが客室となっている。客室は7畳間でユニットバス・IHコンロ・冷暖房・テレビなどを付帯する。宿泊料金は1室当たり7,000円である。こぶしは宿泊施設としての機能の他に地域の高齢者の交流の場としても機能している。例えば、月に2回、地域のボランティアが主催する高齢者交流会「そくさい会」が開かれ、健康チェックや体操、食事（地元食材の活用）などを行っている。

表-3は春蘭の里における宿泊客の推移を示したものである。入り込み数は年々着実に増加していることが分かる。2013年現在、8,602人が宿泊している。内訳は民宿全体4,606人・こぶし3,996人となる。外国人は733人を数え、8%占めている。その他には日帰りの視察・研修なども増加している。

(4) 活動組織

図-2は活動組織を整理したものである。春蘭の里実行委員会を中心として、(農)のと夢づくり工房・農家

民宿群・NPO法人コブシ・(有)春蘭の里ファームからなる。それぞれ機能分担を行っており、司令塔は実行委員会である。同委員会は主に企画・立案・指導を行い、具体的には農家民宿の運営指導、農作業体験・イベント等の指導、特産品開発・栽培品目等の開発などを行っている。こうした組織がお互いに機能し、相乗効果をあげることで、地域の活性化が進展したと言えよう。

(5) 石川県当局の取り組み

春蘭の里の活性化について、石川県当局の取り組みも忘れることは出来ない。石川県では早くから教育旅行の誘致に取り組んでおり、国内と海外に対して誘致活動を行っている。

①国内からの教育旅行の誘致

2003年度に石川県教育旅行誘致実行委員会を設置した。事務局は石川県観光戦略推進部観光振興課情報発信グループで、委員会の構成メンバーは観光関連団体、鉄道・航空会社などである。2008年度より大都市圏からの誘客を開始し、2014年度の事業費は400万円を計上している。

具体的な政策は次の通りである。

誘致を目的とした教育旅行PR資料の作成
学校や旅行会社への直接訪問等の実施
学校の教員や旅行会社の担当者の招聘
など。

また、具体的な誘致先は次の通りである。

金沢市：伝統工芸などのものづくり体験・班別行動・地元高校生によるガイド
七尾市（能登島）・能登町（春蘭の里）：能登の里山里海での自然体験・民泊
小松市・加賀市：企業学習・工芸体験
白山市：スキー体験

その他として、学習プログラムや地域別モデルコースを掲載した「いしかわ教育旅行ガイドブック」を作成し、自然や歴史・文化の両方が一度で味わえる点をアピールしている。

②海外からの教育旅行の誘致

2009年度より教育旅行誘致の取り組みを開始した。担当の部局は石川県観光戦略推進部国際観光課である。2014年度の事業費は350万円を計上している。

具体的な政策は次の通りである。

台湾の学校関係者での教育旅行説明会への参加
台湾・韓国・中国の教育旅行関係者の招聘など

また、具体的な誘致先は次の通りである。

金沢市：歴史文化体験（兼六園・金沢城公園・21世紀美術館など）・ものづくり体験（金箔貼りや和菓子など）、大学キャンパス見学

加賀市・小松市：ものづくり体験（伝統工芸品など）・環境学習・温泉

能登町・輪島市：春蘭の里での農家民泊・農業体験・自然体験、日本航空学園の見学

県内全域：学校交流

など。

以上のように、石川県当局は国内外の教育旅行のマーケットに対して、積極的なアプローチを行い、その結果が春蘭の里の教育旅行の増大に繋がったと言えよう。

3. おわりに

以上、奥能登の春蘭の里を事例として、農村の活性化の実態について報告してきたが、その結果、次のように整理出来よう。

①過疎・少子高齢化が進み、限界集落の一手手前まで進んだ春蘭の里だが、春蘭の里実行委員会を立ち上げることで、その後の方向性が確かになり、この委員会の存在価値は大きい。

②春蘭の里の活性化について、地元住民の努力はもちろんのことだが、石川県・能登町など行政の各種支援があったことも特記事項と言えよう。

③地域サイドの努力の成果は各種表彰に繋がり、これが地域住民の生きがいとなり、次のステップに進むことになった。

④春蘭の里は、日本を代表する平凡な農村と言えよう。平凡とは言え、農村風景など磨けば光る資源が存在し、「あるものを活かす」ことで活性化を実現することになった。

⑤こうした姿勢は、全国で停滞している農村に対して、今後の見本となるもので、学ぶ必要がある。

⑥春蘭の里の活性化は、大規模開発をするのではなく、農村の風景など「あるものを活かす」という「地域づくり」である。ハード・ソフトよりもハート（アイデア・精神など）による地域活性化と言えよう。

⑦今後の課題は、後期高齢者対策である。春蘭の里とて10年後は後期高齢者が多数を占めることになる。都会

で就職している子息が帰郷して家業を継いでこそ、農村の真の再生であり、春蘭の里は必ずやそれを実現すると期待している。

【付記】

写真は2014年10月、筆者撮影。

【謝辞】

本稿の作成に当たり、春蘭の里実行委員会の皆さん、石川県観光交流課の方々の特にお世話になった。ここに記して謝意を表します。

【注】

- 1) 主な報告書やHPなどは次の通り（順不同）
 - 能登町観光ガイド「<http://www.notocho.jp/feature/shunran/>」
 - 春蘭の里「<http://shunran.info/>」
 - 農林水産省「http://www.maff.go.jp/j/nousin/soutyo/tatiagaru/t_jirei/h20/17_syunran.html」
 - 地域づくり団体活動事例集～地域づくり新段階 活動紹介3「http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/1_all/jirei/2012_dantai/case/index3.html」
 - 石川県「<https://www.pref.ishikawa.lg.jp/toshi/keikan/documents/hp.pdf>」
 - 能登町「<http://www.rdp.or.jp/contents/11tatiagaru/pdf/20-17.pdf>」
 - 石川県立大学実践報告「http://ci.nii.ac.jp/els/110009431347.pdf?id=ART0009911392&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1412583904&cp=」
- 2) 北国新聞のイスラエルに関する記事（2014年5月11日付）
「<http://www.hokkoku.co.jp/subpage/H20140511101.htm>」
- 3) 「日本の窓」のHP「<http://www.windowstojapan.com/>」

【参考文献（発行順）】

- 山下良平・一ノ瀬友博（2011）「地域発展過程の合意形成の特性に注目した過疎地型経営モデルに関する事例研究－石川県能登町「春蘭の里」における取り組みから－」農村計画学会誌 30-3、pp.436-442。
- 黄靖惠（2013）「持続可能な経営による民宿村の開発－日本の経験を活用して－」東洋大学国際地域学専攻修士論文（概要）2012年度、4p。